

第4回青森県地方分権シンポジウム基調講演 「地域が拓く日本の未来」

講師：慶應義塾大学総合政策学部教授、前宮城県知事 浅野史郎氏

日時 平成19年2月14日

場所 青森国際ホテル 萬葉の間

今日仙台からやって来ました。

本当は、こういうのがトークセッションというようなもんですね。あの辺から来たから。まあいいんです。

仙台には雪ないんですが、ここは少しありましたね。それから、青森県地方の携帯電話ってあんなに鳴るんだなということも分かって、来て良かったと思いましたよ。いろいろ地域によって違う。地域が拓く日本の未来、いろんなものがある。携帯電話もこんなに違うのかということとは、やっぱり聞いてみなきゃ分からないもんですね。

2時ぴったりにまで話します。1時59分に私の電波時計が予鈴を鳴らします、小さく。こういう時も時間をぴったり守るとするのは、私、自分で主義で課しているんです。何でそんなにぴったり終わるんですか？時間が来たらやめればいいんです。これがなかなか出来ないんですけどね。

ということで、今日お話するのは、一応、地方分権ということですが、その中で、先に言うておかないと忘れちゃうんで、その話をし、三位一体改革それから、その中で地方議会の話もしたいと。青森県議会はどうしているんだと。青森市議会どうしているんだと。弘前市議会どうしているんだ、という議会の、地方議会の問題というのもお話ししたいし、市町村合併、道州制というものも最後にちょっと触れられればと思っています。普通、この話題で私1時間半使って話をするんですが、今日は52分40秒でやれていうんですね。ちょっと急ぎ足になるとしています。

それにしても、今、地方分権ということが、別な意味で言われています。地方分権、地方分権っていうけども、ちょっと地方にいろいろ任せられないと。官製談合、福島県でしょう。和歌山県、宮崎県ということで、皆捕まって、次はどこだともで言われているんです。その前には岐阜県で裏金の問題。自分達が払った税金の予算で、何百万円か燃やされてしまった。何だこれはという、裏金の問題というのがありました。それから、夕張市の財政破綻ですね。そういう問題が出てきた。地方に任せられないと。やれば知事はすぐ官製談合とかやってしまうと。それを聞いて、私は知事を辞めていましたが、あんたには言われたくないんだけどな、という人もいますよ、言ってくる人には。

だけど私は、今日言いたいのは、今こそ地方分権なんですよ。それは何故かという、地方分権、さっきも出納長さんの三村知事の代読のお話であった時、地方はどういうふうにしていくとあった時に、地方って何ですか？その場合、何となく頭にあるのは青森県庁なんですよ。弘前市役所なんですよ。そうじゃなくて、私はむしろ地方というよりもこの地域、地域、言葉の問題じゃないですよ。その場合地方でもいいんですが、スポンと抜けているのは住民なんです。納税者。有権者としての住民、これが地方なんです。ということがまず1つ。

それから、地方対中央といって、東京はいいなとか、東京のようになりたいなというふうにする時に、私はこの青森出身の伊奈かっぺいさんの漫談を思い出しますよ。青森の市場で、何かツブ貝とか何とかいろいろ売っている時に、必ず「地方発送承ります」と書いてあるんです。東京に送る場合も地方発送承りますですから。あっそうか、東京も地方なんだと。そうなんです。地方分権で三位一体改革だと言っている時は、東京も地方なんです。東京都庁というのは地方なんです。国、霞ヶ関は国です。

というふうに、東京も47都道府県、自治体の1つ、ですから地方ということもまず抑えなくちゃいけない。だから、地方という時に、ちょっとその所の頭の整理もさせてもらって、今日お話するのは、特に全般の地方といった場合に、青森県庁だけじゃないですよ。弘前市役所だけじゃないですよ。そこに住んでいらっしゃる住民、その住民の方を住民と呼ぶのではなくて、本当は、今日の文脈上はむしろ納税者。納税者、タックス・ペイヤーだね。タックス・ペイヤーのペイなんです。納税者って納めているんだけど、「ペイ」払っているんです。税を払っている人としての住民。こういう存在があって地方ということをおさえておく必要がある。

それは、これまた先に言っちゃうと、今日お話するキーワードは、民主主義ということなんです。本物の民主主義というものを根付かせるというか、そのための地方分権、そのための三位一体改革ですよ。だから、地方議会の役割というのは非常に大きい、ということに結び付けていく話なんです。

それにしても、最近テレビでも何か、東国原さん、東国原ネタとなると浅野さん、呼ばれるんです。昔は地方自治体、不祥事問題。まず岐阜県から始まって、裏金の問題といえば浅野さんとか。官製談合といえば浅野さん。地方自治体不祥事問題評論家、浅野史郎っていうふうにな刺に刷ろうかと思うくらいになってきたんですが。最近それでも一段落ついて、その官製談合で倒れた宮崎県の出直し知事選挙で出てきた、東国原英夫さん。前向きな方になってきたと。今も副知事をどうするかというようなことがあります。

そもそも、東国原さん、元々そのまんま東さんという方が宮崎県の出直し知事選挙に出るといった時に、報道を聞いて青森県地方の皆さん、あの方勝つと思いました？面白そうだけど、勝つとは思わなかったでしょう。私も実は思わなかった。

ただ、選挙を終わってみて、選挙終わると、その選挙期間中の活躍ぶりというのが、改めて報道されるんです。選挙期間中は、不公平になるから余りやらないんだけど。あれを見て、あっ、この方は勝つべくして勝ったと思いました。選挙のやり方もそうです。

行政経験がないということが、随分マイナスというふうに言われましたが、これはプラスだったんです。今回の選挙は、任期満了に伴う知事選挙じゃないんですよ。出直し知事選挙なんです。出直しということは、出直しになる理由があったんです。今どき、こんな知事選挙があるはずなかったんです。それは、官製談合で逮捕ということになって、それは宮崎県民は恥をかいたんですよ。怒ったんですよ。ふざけんじゃないと。

それは、知事一人だけでなく、そういうことを生んだ体制に対して。ということで恥ずかしかったり、怒ったりした。そうすると、行政経験なしというのは、そういう土壌とか体制に最も遠い人として取られた。輝いて見えたんですよ。額だけじゃないんですよ、輝いて見えるというのは。

そういう意味で、行政経験なしというのは、林野庁長官さんとか、経済産業省の課長さんというよりは、むしろ、出直し知事選挙においてはプラスに感じられたと。あの選挙で正々堂々たる選挙ですよ。しかも、業界とか団体とか、殆ど全く使わずに、短期で自転車で走り回ったり、汗かきかき。ああいう正々堂々たる選挙をやって、有権者に一番近かったと、距離が。そういうような選挙を経て知事になった。だから私は、全く心配していないんです。彼の行政経験ないとか、芸能人だとか、そういうことを。それは、あの選挙の仕方を見たら立派な知事になる。

私は私の中に血となり肉となっている考え方というか、何と言ったらいいんですかね。選挙のあり様がその後の知事、市長の4年間のあり様を決定づけていると思っています。良くも悪くも。悪くも出たのが官製談合ですね。選挙の時に借りた物の借りを返すというような形で官製談合ということに結び付いていったということですね。

選挙の時に世話になったと。業界なり特定の会社に人も金も票も車も出してもらった。それで知事になりました、市長になりましたと言って、その方々が挨拶に来た時に、やっぱりそれは挨拶するんじゃなくて、ちゃんと顔を見ているんですよ。俺のことを覚えているんだろうなということを確認に来るわけですから。その時に、「いやいや、お世話になりました」というだけで済むかどうか。選挙は選挙なんだから。これから知事として全然関係ないんだからって、なかなか言えないんですよ。借りた恩を返すというのは、人の道だって僕は教科書で習った覚えがあるんですね。それは人の道なんですよ。借りた金を返すのも、借りた恩も返すのも、人の道なんです。それを知らんというのは、人の道に外れます。だから、選挙で借りを作っちゃいけないんですよ。特定の借りを作っちゃいけないんですね。

そういう所でズブズブになっていって、というのが官製談合の原因。あれは決して、多選の弊害じゃないですからね。官製談合になったって。福島県知事がああいうふうになった時に、これは多選の弊害だとか。5期、18年やられた佐藤栄作さん。そういうあれだったから言われたんで、僕は即座に、あの時点において違うとこれは。やる人は1期目からやっている。そしたらやっぱり宮崎県知事は1期目ですからね。木村良樹和歌山県知事は2期目のはじめでしょ。やる人は最初からやっているんです。多選の弊害で官製談合になったんではなくて、官製談合をやるような体質が多選に結び付くんですよ。矢印の方向は逆なんです。多選の弊害で官製談合になるとすれば、官製談合を防ぐためには多選を禁止すればいいという、とんでもない結論に導かれるでしょう。多選を禁止すれば官製談合が無くなるのか。そんなことはない。ということでごちゃと言いました。

東国原さん、あれだけ正々堂々たる選挙をやった。私も同じような13年前の選挙を思い起こすと、出生の秘密って言っています。ああやって生まれ落ちた。つまり知事として生まれ落ちたあの経緯ですね。出直し選挙だと。そしてその選挙において、県民の方々からの強い期待というものを受けた。これは、忘れろって言っても忘れられないんですよ。そこに入った当人からすれば、もう、目に焼き付いているんですよ。心に張り付いているんですね。

だから、初心忘れるべからずというのも、変なような感じ。忘るべからずというのは、何か注意していっているということ、忘れるはずもないんです。4年間は持ちますから。ということなんで、東国原英夫知事について、私は心配していない。若干、今度の副知事人事で、誰にしたかというのではなく、あの経過を途中言っちゃいけないと、私は一生懸命止めたんですが。さっき善哉だったのが、私が何かその渦中みたいになったから、俺は人事については話さないと。あの辺にいる記者にもちゃんと言っているんですが。それはともかく。

それで、今こそ地方分権というのは、官製談合というのがありました。岐阜県では裏金づくりということで、お金が燃やされたりしました。夕張での財政破綻。明日は我が身の夕張市ですよ。夕張市を笑ってられません。他人事とは思っておられません。明日は我が身の夕張市なんですね。ああいうようなことを見ていくと、地方分権なんかとんでもないと言っているんだけど、あれは、納税者としてメッセージはどういうことかということ、お任せをしているとこんなことになっちゃいますよと。

つまり、県の予算のお金がどう使われているか、全然関心もない。そんなもの、市民オンブズマンくらいにやらせておけばというふうに思ったのが、岐阜県ではあんなことになっちゃって。やっぱりちゃんと監視していないとまずいよなと。官製談合だってそうですよね。ちゃんと監視していないと駄目だよなと。夕張市だって、今頃、夕張市長さんが市民に説明して、保育所の利用料は何倍になります。学校は7つを1つに統合しますとか言って、とんでもないと言っているけど、あれ、10年前にちゃんと気が付いて言っていれば、違うストーリーにな

ったかもしれない。全部共通して言えるのは、住民、納税者が自分の税金を納めた自治体がどのような活動をしているのかということについて関心を持ってということなんです。ちょっと厳しく言えば、無関心は罪なんです。無関心はツケが回ってくるということなんです。これを別の言い方で言えば、お任せ民主主義と私は言っているんですね。お任せ民主主義。これは、本物の民主主義と言っていることの反対語です。本物の民主主義の反対語は、偽物の民主主義じゃなくて、お任せ民主主義ということなんです。

そういう所から三位一体改革って、何だか急に訳分からないことになってきたって。三位一体改革って、そもそも何でしょうか。三位一体改革って聞いたことがある人って、聞きませんよ、今日は。慶応大学で三位一体改革、聞いたことがある諸君手を挙げてって言ったら全員手挙げるんですよ。何でと言ったら、先生が今言いましたって。ふざけんじゃねえよって。そうじゃないと。教室に入ってくる前に聞いたことがあるかと。じゃ、三位一体改革って説明できる人って、手を挙げません。手を挙げるとあてられるから。今日も手は挙がると思いますが。

じゃ、三位一体改革ということに賛成ですか、反対ですかって聞くと、大体の方は賛成ですと言います。その前に三位一体改革っていうのは、あれはダビンチコードですから、元々は。神と精霊とイエスキリスト。3つのものがバラバラだけど、これは一体なんだと。苦し紛れっていうか、言わざるを得ないんですよ、教義上。元々はイエスキリスト、あれは人間なのか神なのか、という議論からですからね。

ダビンチコードという映画、小説であったように、これは人間だとか。だから、マクダナの MARIA という愛人がいて、それに女の子を産ませたんだという。その女の子の子孫が、ここにいる考古学者だと。荒唐無稽な話なんです。

そういう、これは宗教用語ですね。それを片山虎之助という、当時の総務大臣が使って、今回の国と地方との財源のやり取りの中で、地方、青森県が店張っているというのは、何に金を使っているんですかって。青森県税として集めた税金と。それから、国から貰う国庫補助金、国庫負担金と。それから、地方交付税と3つあるねと。もう1つ、地方債という借金もあるんだけど。前の方の3つ、これをいっぺんにトンと改革しましょうというのが、三位一体改革。要するに、3つ一緒にというだけのことなのね。そこに三位一体改革なんて言葉を使うことが、そもそもその片山大臣は、この言葉を使う時にローマ法王にちゃんと許可を取ったのかという重大な問題があるんですが、取ってないんですね。

その言葉も分かり難いということなんです。一応、お金の問題であります。それから、国と地方で、地方の財源の問題です。そして3ついっぺんに改革ということ、改革の方向は、基本的には国庫補助金、国庫負担金というものを止めるということなんです。廃止することなんです。問題は、補助金くれくれって言っているのに、無くすということを知事も言っ

ているの。そうなんです。それは、まず三位一体改革ができたのが、完成した時に損得は無しということなんです。その補助金、国庫補助金、負担金は3兆円分廃止しましょうと。そのかわり、国から地方に税源というものを3兆円移転しましょうと。所得税という、国税にしている分を地方税に振り替える、3兆円。余り細かいことをやらなくても、とにかく損得ないんだな、というくらいで覚えてもらえばいい。損得ないんです、これ。金の面では。国と地方では。全体で見れば。

そして、国庫補助金、負担金を廃止するということなんです。似たような言葉で、削減するというのがあります。国庫補助金、負担金、削減するというのと混同しちゃいけないんですよ。これは、天と地ほど意味合いが違います。我々、地方側が言ったのは、国庫補助金、負担金の廃止ですよ、あくまでも、廃止。削減、削るのとは違う。

2004年の8月に新潟市で歴史的な全国知事会がありました。これは、その三位一体改革、3兆円の税源移譲、同額の国庫補助金、負担金の廃止ということをして2003年の骨太の方針で初めて言って、それを案を作れっていうふうに当時の小泉純一郎総理大臣は、我々地方側に、特に全国知事会に命じてきたんです。頼んできたんです。

つまり、国庫補助金、負担金を廃止という時に、じゃ、廃止する事業のリストを作れって言われたんです。我々は、喧喧諤諤議論して150何項目の国庫補助金、負担金要りませんと、そういうリストを作ったんです。その中にちょっと議論になった義務教育国庫負担の中学校分なんていうのが8500億って。その150の国庫補助金、負担金というのは廃止すると、合計3兆2千億というお金が出てくるんです。3兆2千億国庫補助金、負担金廃止して、税源移譲は3兆円と。我々も太っ腹だから2千億なんかいいですと。これは、無駄の部分があるから、これで無くなりますと言って、そういうふうにしたんです。あくまでも廃止ということですよ。そういう国庫補助金、負担金の制度を、施策を止めるということ。これもポイントして覚えておいてください。

ただ、最後の結末の所で、ここが凄く大事な意味を持ってきたんですよ。政府がやったのは、殆ど削減だったんです。だから、義務教育の国庫負担率、今、2分の1なんです。青森県が半分持って、国が半分持っている。青森市は一銭も持っていないんですよ。義務教育の小学校、青森市立第3小学校の教員の給料というのは、青森市は一銭も持っていない。青森県が全額持っているんですよ。全額もって、その半分が国からくる。これが義務教育国家負担なんです、教員の給料。

その2分の1という負担率を今回3分の1にしちゃったんです。それで、何と8500億円稼いだんです。この分削減したからねと。だから、それを足して行って3兆何千億稼いだんです。この分、削減したからねって。だから、それを足して行って、3兆何千億になって、じゃ、3兆円を税源移譲という、こういうふうにしたということなんです。

ちょっと面倒臭いね。いいの覚えなくて、「何だかそんなようなことがあったな」でいいんです。メモ取るほどのこともないんです。一応こういうことで。

今日、言いたいのは、どうしようかな。じゃ、三位一体改革賛成ですか、反対ですか。大体の方は賛成っていうんです。その次に、何で賛成なんですか、三位一体改革を進めること。このへんからちょっと曖昧になってきて、それが世の中の流れというようなものではないんでしょうかとか。いや、慶応大学の浅野先生がおっしゃっているからいいんだと思いますと、全く他力本願になってしまう。

さらに、じゃ、三位一体改革というのが進むと、あなたは今より幸せになるんですか。別にそんなことはないと思いますけども、というふうに言われたらば、私は、いや、そんなことはないことはないことはないことはないんだよということを、これから1時間半かけて説明しますと。普通、三位一体改革について講演させられると、そうやって、こちらか1時間半かかるんです。

結論は、三位一体改革が進むと、皆さんは幸せになるんです。その幸せといっても、急に金が儲かるようになるとか。今日は2月14日バレンタインデーでチョコレートが一杯くるようになる。異性にもてるようになる。そういう意味じゃないんです。それはやっぱり物差しがあります。それが、さっきから何回か言っている本物の民主主義という意味では、進みますよという意味。三位一体改革が進めば、その意味で幸せになりますと。

ということは、大事なことも言っているんですよ。三位一体改革というのは、所詮、国と地方の財源巡っての綱引き合戦だというイメージでは、捉えないで欲しいということも言っているわけです。これは住民に関係するんだと。民主主義の問題だということ、これは僕は、ほかの知事の今の人達とはちょっと違うアクセントをつけながら説明をしていますが、そういうのが浅野理論なんです。

それは何故かというようなことをちょっと、今日は時間がないし、例示を付けるというから、ドメスティックバイオレンス、DVですね。DV被害者相談事業補助金というのがあるんです。これも、新潟での会議の時に、我々知事会として、廃止するリストの中に入っていたものです。これは市町村の事業です。青森県の事業じゃなくて、弘前市の事業です。

DV被害者相談事業というのを持たされている霞ヶ関のお兄ちゃんがいるわけです。補助金を弘前市に出してこの事業をやると。その補助金を廃止しろと我々は言ったわけです。もちろん、それだけ廃止するようになると、150項目の中の1つですよ。これ、全部、スポンと止めて、別の財源を貰うんですから、税金で。それを今度どう使うかということは、市町村によって自由だよという体制にしようということなんですね。いいですか。

そういう時に、ちょっとショックだったという話があるんです。これは、片山善博鳥取県知事ね。あれにはかなわないというところがあるんです。勿論、あれもこれだけでも。それだけじゃなくて、あれ子ども6人もいるんですよ。これはかなわない。本妻だけで6人ですよ。何か誹謗中傷したことになるんだろうかな。これはかなわないんです、今から間に合わないんです。

その彼が、この話でショックだというふうに言ったんですよ。というのは、これを作ったでしょう。DV被害者相談事業廃止というリストを作ったら、女性団体から、そんなの廃止するの止めてくれという陳情が彼の所に来たというのでショックだった。つまり、そういう、相当意識が高い女性団体の人達も、この三位一体改革ということの本質を理解していないんだなということでもショックだったと。私も同じ意味です。そのことについてどういう意味なのかということをお話します。

三位一体改革の第一幕が今閉じたという状況になっているんですね。その第一幕が閉じた段階では、じゃ、評価してみてくださいと、これ。私から言わせたら、これはもう殆ど0点に近いと言っているんですよ。厳しく言うと。茶番劇で終わったと。その趣旨は、さっきからこだわっていた、我々は補助金、負担金の廃止と言っていたのに、削減という形に変えられてしまったんです、大筋の所で。だから、実際に補助金、負担金の廃止というのは、ほんの僅かしかない。こんなもので、地域の、地方の自立、財政的な自立が増えるのか。裁量の余地が増えるのかといったら、それはノーなんです。それはそうですよね。我々、補助金2分の1が3分の1になったら、我々の自由度増えますか。どっちにしろ、その補助金、負担金貰いにいかにくちやいけないんですよ。黙っていて頂戴してくれませんか。申請書書いて、説明して、貰ってくるという、そういう手間暇だけ言ったって変わっていないんです。2分の1を3分の1にしちゃうの。止めちゃえば別でしょう、全部。そんな補助金、負担金の制度自体止めちゃえば貰いにいく必要かないんですから。ということなんです。

その時に、やっぱり新聞も評論家も批判しました。霞ヶ関を。何だあいつらと。あいつらって言いますね、霞ヶ関の。補助金分配業という、その補助金を持っているということ死守した。既得権益にかじりついた、支給派だと、というような批判をしました。それはそうですね。補助金が手元に残っているんですから。

だけど彼ら本人、あの霞ヶ関の補助金分配業にいそしんでいるお兄ちゃん、お姉ちゃん方は、そんなことを思っていないですよ。大真面目で、これは必要なんだと思っています。支給派なんてそんなんじゃないと。人間、大真面目ほどやりにくものはないんですよ。という話もあるんですが。

国庫補助金という名前の補助金はありませんからね。あるのは、DV被害者相談事業補助金とか。老人福祉施設整備費補助金とか。必ず前に事業名がついて、そしてその補助金は

その目的にしか使えないということ。これも大きいんですね。これは補助金の縦割りということ。それにしか使えないんです。

DV被害者相談事業補助金というのを持たされているお兄ちゃん、お姉ちゃんがいるわけ。霞ヶ関にね。そのお兄ちゃん、お姉ちゃんからすれば、ダメ自治体という頭があるんですよ。それは、全般的にこの自治体はダメ自治体だという意味じゃないですよ。だって、このお兄ちゃん、お姉ちゃんは、DV被害者相談事業補助金というものだけを持たされている、そのお兄ちゃん、お姉ちゃん目から見てダメ自治体。

例えば、DVってあれですからね。ドメスティックバイオレンスというのは、ワイン瓶で旦那の頭をぶっ殺しという、あの前のストーリーがあったでしょう。あの夫が妻を殴ったとか。これがDVです。ドメスティックバイオレンス。家庭内暴力ということ。多くは、夫から妻へということなんですが。これがDVですよ。ドメスティックバイオレンス。

そういう被害者というのを駆け込み寺にかくまうとか。いろんな相談に乗ってやるというのが、DV被害者相談事業。それを市町村でやっているのに補助金を出すお兄ちゃん、お姉ちゃんという話をしているわけです。

そのお兄ちゃん、お姉ちゃんからすれば、ダメ自治体というのがあると。青森県のあの町だろう。あの町長、DV？そんなものを食ったことないって言うくらいだから。あの議会だって、男女共同参画社会？三角も四角もあったもんじゃないと。そういう所だから。ダメ自治体、この事業に関しては。

だから、今、補助金を出しているのからこの事業をやっているけど、補助金を切ってごらん。なさい、止めたって。もう真っ先にあの町では、だって、DV食ったことないっていうんだから。もう止めちゃう。止めちゃってどうなるか。そしたら、そこだってDV被害者、いらっしゃるでしょう。その方が困っちゃう、ということ。だから、俺はこの補助金を出し続けるんだということ。ですね。もう肩に力入って言っていますよ。それはそうだと。だから私、肩に力入って、この補助金やっぱり必要なんだ。これはこういうことをやるために国家公務員になったんだと。えらく肩に力入っていますから、トントントンと後ろから肩叩いてやってお兄ちゃんに。じゃ、分かった、ダメ自治体というのが。そのダメ自治体というのは、いつ、どうやったらダメ自治体じゃなくなるの？と聞くと、永久に補助金出し続けなくちゃいけないんですよ。じゃ、補助金出すの止めてみましょうと、これについて。そうすると、あの町だから、町長さん、DVなんて食ったことないと、真っ先に止めちゃう、そんなの。止めちゃったら、DV被害者という方は困っちゃいますよ。今まで事業やっていたのに無くなってしまうと。これが格差という話なんです。格差、格差、格差。私はあんまり言うなっていうことなんです、本当は。格差格差格差が嫌で嫌で嫌でたまないんだったら、全部自治体の事業を国営にしまえばいいじゃないですか。何のために地方自治体というのがあるの？格差があるんですよ。あるのを

無くそうとする話をこれからするんですけど、で、止めちゃう。それで、ストーリーが終わるかということなんです。

DV被害者という方は現にいらっしゃいます。それから、それを支援している団体の方もいらっしゃいます。その事業を止めちゃったと。あの町長だと。町長の所に行くでしょう。町長、ちょっとふざけんじゃないよと。冗談じゃないと。補助金が無くなったからといって、こんな事業を止められるとこっち困るんだと。ワーと一杯行っていくと、町長も「いや、それもそうだな」と言って復活する。

これはどういうことかという、それはDV被害者相談事業だけじゃなくてもいいんですよ。これはありとあらゆる地方自治体が補助金をもらってやっている事業にあてはめれば同じことなんです。じゃ、この事業がある町で、ちゃんとやられているというか、やられているということは誰が担保しているのか。霞ヶ関が補助金を出して担保しているというシステムと、いや、こんなの止めちゃったら、今のように住民が黙ってないぞという住民の目が担保しているという、どっちのシステムがいいですかということなんです。

これは、全体からいえば、いいですか。私は後者を選ぶということなんです。それはだから、1つの住民として、全体の価値観の問題なんです、実は。はっきり言えば、こうやっていろんな事業を自治体にやらせるというのは、補助金で担保しているというのは、これは後進国家よ。発展途上国型、いつまでやるの？23世紀くらいまでやるの日本は？

それで、地域が拓く日本の未来といえ、地域はやっぱり自分達のことを自分で決めていくということにする。それが三位一体改革の思想性ということは今言っているわけです。

そういう状況になっていくということなんです。今言ったことは嘘ですよ。今言ったという中で嘘があるのは、ストーリーの中でこのDV被害者相談事業を止めちゃったという時に、住民が町長の所に行って「ふざけんじゃない、町長」こういうことは起こりません。だってそうでしょう。町長、秘書課がちゃんといて困っているもの。町長室なんか入れませんよ。関係者以外立入禁止。それでも入って行ったら守衛さん呼ばれて、つまみ出されるのがおちですから。こういうことは起きないんで、普通は。

普通、起きるのは、議員ですよ、議会ですよ。町長というのは、そこで一人、一元代表制とありますが。議会、議員さんは小さな町でも20人位いるでしょう。その20人の中の何人かは、今のような事業。例えば、DV被害者相談事業とか、そういうような女性の地位を守るとかというようなことをバックにして出ている議員さんがいらっしゃるんですよ、何人かは、そういうことをやっている団体に押されてみたいな。

その議員さん達が町長の所に行くんですよ、「ふざけんじゃねえ」と。ふざけんじゃねえと言わなくても、議会の場で質問でいじめるとか。そうすると、やっぱり町長さんもそれはまず

いということで、さっきのようなストーリーになるということはありません。

そこで議会の話になるわけです。議会は、何をやっているんだろうかということを思いますよ。今、じゃ、議会って何ですか？議会の役割って何ですか？と。議会は、例えば、何とか町議会は、町長に対するチェック機関です。青森県議会は、三村知事に対するチェック機関です。それは確かにチェック機関ではある。それを強調するのも分かりますよ。だけど、確かにチェック機能すら全く果たしていないとしか思えない議会が沢山あるからです。だけどチェックするくらいだったら、別に2～3人いればいいんじゃないの？何も何十人もいらぬ、ということもあるし。

それから、議会と知事は車の両輪ですと。同じ方向を向いてずっと回っているんだしたら一輪車の方がよっぽど小回りがきく。地方自治の教科書の1ページ目に何が書いてあるかという、1ページ目には、議会は唯一の立法機関と書いてあるわけです。青森県の何とか条例というのは、三村知事には制定権ないんですよ。知事には、条例案というものを提案する権限はある。それを制定するというのは、一人、青森県議会だけの権能です。青森県議会で条例を作れる。しかも、青森県議会は、その条例を提案することもできます。提案もできますし、それを決定して成立させて条例を作るということが出来る唯一の機関なんです。国会と同じですね。唯一の立法機関です。その部分どうなっているんだべ、という話になるんです。

宮城県知事時代、1997年だったかな。宮城県議会で、2つの条例ができました。NPO促進条例と暴走族根絶促進条例という2つの条例が。これは議員提案でなされた条例が成立したと。画期的なこと。久し振りだと。どのくらい久し振りだって秘書課の職員に聞いたら、50何年振りなんでございますと。エッ。宮城県議会においては、50何年間、議員提案のこういう実質的な内容を持った条例って1本も出来ていなかった。50何年振りだと。

そもそも、こういうような議員提案の条例が出来たというのは、それは浅野憎しということの賜なんです。何か、浅野知事だけどうせこれだから目立っていると。それじゃ、議会も少し存在感を示さなくちゃということで、議員提案の条例を出した。ライバル関係ですね。こういうライバル関係はいいんですよ。切磋琢磨というか。

それもあって、宮城県議会は、この10年間に20本以上の議員提案の条例を成立させてきました。これで日本一なんですよ、数からいって。日本一、二なんです。三重県とどっちかなんです。ということは、青森県も含めた残りの45都道府県の議会というのは、議員提案の条例の数は、私の知る限り、これ以下なんです。ちゃんとやっているのかと。唯一の立法機関。基本的に、条例提案は執行部側でいいんですよ。でも、ゼロということはないべと。いや、そんなことを言っても条例を作るのは大変なんですよ。我々に手足がないと。議会事務局を充実してもらわなくちゃいけないと。知事の所、市長の所に行くと、そんなもの駄目だ

と。何でと。議員提案の条例を1つも作っていないでしようと言われるんです。だからこれは、卵が先か鶏が先かっていったら、卵が先で、まず這ってもずっとも一生懸命議員提案の条例1本は成立させるということです。それでやってから、もうこれは議会事務局の力もあまり借りられないですね。自分達で本当に泣きながらそういう条例を提案して成立させたら、今度はそれを実績を持って知事の所に行けばいいんですよ。市長の所に行けばいいんですよ。こうやって、条例を作ったけども、これからもっと条例案を作っていくためには手足がいる、ということだと実績を持ったから迫力がありますよね。というようなことでまずいく。その条例提案が1つ。

それから私は、議会、もうちょっと予算編成にも関わっていいと思っています。勿論これ、制度上は予算編成権というのは、知事に専権、市長に専権ですね。議会は、執行部側が作ってきた予算案を承認するという権限しかないんだけど、実質的に編成ということで、もうちょっとコミットしてもいいんじゃないか。俺の家の前のこの道路を直す予算をつけるとか、こういうのではなくて、予算は施策なんです。具体的な施策。それに予算がついているでしょう。だから、こういう施策をやるための予算を作れとか。今、こういう財政難の時代だから、この予算はいいんじゃないかねとか。もう止めてもとか。半分にしても。その代わり、こっちに付けたらどうだという提案をする。

実際は、それは非常に難しいですよ。議会には編成権がないから。だから、その時にどうするかというと、執行部のお兄ちゃん、お姉ちゃんをつるんでというあれなんだけど、これを英語で言うといいんだよ、コラボレーションって言うんだね。コラボレーションをして、その何とか課長というのも、予算編成時期、今もう終わっちゃったんですけど、予算編成時期は、知事と敵対しているんですかね。相手は敵。つまり、この課長さんは、自分の所の予算を知事の所からぶんどってくるという。敵と言ったらなんだけど。その時に、援軍として議員さんを使えばいいと。だけど、これは知事とか市長、すごく嫌がりますから。そのへんでつるんでやっていると。そういうのが見つかったら、この課長さんは、多分左遷されるか、意地悪されます。だったら、最初からオープンにしちゃったらどうかと。僕は、宮城県のある市長に提案をしました。市長さん、これこういうふうにやったらどうだと。多分、最初だから全部の予算についてっていうのはなかなか難しい。福祉関係のこういう新規の予算を考えている。これちょっと議員さん、少し知恵を貸してやってよ、ということでやらせる。

これは、本当は議員さんはお手のものなんです。知事やっていて、議会が凄く嫌がったということがああるんです。それは、知事がタウンミーティングみたいにして、車座集会みたいなことで、時々街に出かけて行って、1日県民の方の意見を聴くという。誰も反対できないんだけど、本当は苦々しげに見ています。何んてかという、あの仕事は俺達の仕事だと。つまり、住民の代表として、選ばれて議員。そんなに知事に直接聴かれたら、私の商売あがったりだと。そういう感じを持っています。

これは、全然、知事なんか敵じゃないですよ。敵じゃないというのは、知事の方がずっと住民との関係においては弱い、弱いというか。だって忙しいんだから、知事は。せいぜい住民と直接話すとか何とかっていても月に1回ですよ、せいぜい。それもちょっと格好つけみたいなもので。一人ですから、知事は。だけど議員さんというのは、住民の方とこうやって話し合うというのは、それが商売なんだから。四六時中それだけやってもいいくらいのものでしょう。しかも、何十人というんです。たった一人の知事、かなうはずがないと。

そして、そうやって住民の方から話を聴いて、皮膚感覚というか、そういうことで、今、ここで困っているんだ、というようなことを集めてきて、それを政策にしてということは、予算にして施策、こういう施策必要だよなって。つまり、唯一の立法機関であると同時に、議会はそういう意味で、多元的ではあるんだけど、たった一人の知事なり市長に対する政策立案の所でぶつけ合う関係なんですよ。ライバルなんですよ。これは敵と言わないですよ。何と言ったらいいんですかね。補完と言うんでしょうかね。そういう役割を果たしていけば、教科書通りはそういうことなんですよ。議会というのは、そういう役割を果たしている。その時のよすがは住民からのそういう要望なんです。さっき、DV被害者相談事業補助金止めたらといった時のストーリーもその1つを言ったんです。議員さんが、日常活動において、そうやって住民とこういうふうにはやっていけば、そういう中でああいう問題出てくるでしょう。そんな事業を止めたら大変だというのはピンとくるんですよ、議員さんって。普通、日常活動やっていけば。そしたら町長、ふざけんじゃないということが言えるということの集積で、実はその町なり市なり県の政策というのが、もまれもまれて出ていくというのが、これが地方自治の何故知事のほかに議会がいるのかということの理由ですよ。

その中に、やっぱり議員さんだって選ばれるわけです。今、一般の有権者は、これから統一地方選挙あるけども、議員さんをどういう基準で選びますか。これも、慶応で地方自治教えています。彼等は、後からも言いますが、国政なんかは興味あるんですよ。安倍内閣がどうの、支持率がどうのと。北朝鮮6か国協議どうですか。イラク問題とか。国の政治とか国際政治というのが興味ある。だけど、地方自治は興味ない。あるとしても、せいぜい知事とか市長とかそのくらい。議員さんの名前、自分の出身した町の議員さんの名前、一人でも知っている学生って殆どいないです。自分の親父がそうなんです。これは例外みたいなものです。殆ど知らないと。

そういう中で、本当に笑ってられない多くの方も、じゃ、選挙の時にどうやって選びますか、議員さん。いや、うちの高校の先輩なんだとか。非常に私の尊敬する人に推薦されたんだとか。俺の親父の葬式に来てくれたんだよとか。気さくなんだよ、あの人は。夏祭りに一緒に浴衣着て踊ってくれるんだから。酒、つえんだよう。カラオケが上手くてね。こうやって選ばれる方もあまり幸せな気はしませんよ。そうでなくて、条例を提案する、そうすると、できた条例について、これは浅野史郎条例って付ければいいんですよ、勝手に。勝手にじゃないけども、俗称で。この条例、俺が作ったんだと。この予算は俺が取ったんだというよう

なことで、マイクを持って訴えればいいんです。

どうも、それが無いから、議員さんの、僕は中央議会の特に与党離れということの問題を言っています。議員さんとしては、ある党を除いたら与党であるしかないと思っているんです。自分の存在意義は、だって、売り込む時に、自分の議員としての役割を売り込む時に、この町、この自分の選挙区の所に県から市から事業を持って来る。予算を取ってくる、というふうにした時に、この取ってくる相手方とお友達じゃなければいけないと思いますよね。つまり、そこのパイプの太さとパイプの数を誇っているわけですから、それが俺の存在理由だと。繋ぎ役だと。パイプ。だとすれば、与党でいらずんば、議員として活動出来ないと思って。これは、選挙の時に如実に出るわけです、多くは。最近ちょっと変わってきましたが、大体有力だ、現職の所にドドーと議員さんも雪崩れうっていきます。何故かという、与党でなければ、与党でないという恐怖感みたいなものを感じて。これは、決して健全ではないんですよ、地方議会として、こんな関係は。だから、結果的にチェック機関としての役割も果たせなくなってしまふ。そんな議会は無くてもいいと。

今、政務調査費が問題になっているんですね。ここでも問題になっていると思います。政務調査費。まず、東京都の目黒区議会からあって、北海道にいて議長さんが政務調査費で抱き枕を買ってきましたとか。目黒から新宿までいくタクシー券を発行したのが、沖縄県那覇市のタクシー会社の領収書でしたと。エーって。5万円以下は領収書要りませんとか。全く領収書が無いような所もある。ふざけんじゃないと。みのさんが「ほっとけない」とやっていますでしょう。

これはこれでいいんだけど、僕は、それで怒るとしたら、政務調査費でしょう、名前が。政務を調査するお金だから、それによって、それは手段ですよ。結局、政策を作っていくためのいろいろお勉強したり視察したりすることが必要でしょうから、ということでそのためのお金を出しているんだから。結果として、そういう政策提案も何もしないで、政務調査費ちゃんと使いました。領収書全部この通りありますと言っても、何もしていなければ、それは本当は無駄なんです。もっと言ったら、何で給料を払っているんだろうかと、議員さんに、政務調査費どころの話じゃないんですよ。

実は僕は、慶応大学の地方自治のレポートの問題で、これは、レポートを出させているものですから、最初の僕は教授になったばかりの頃、訳分からなくて、問題は市町村合併の意義を書けという、インターネットで皆調べてきたその通り書くんですよ。これじゃ問題にならないといって、少し知識を問う問題じゃない問題を出したんです。その1つが地方議会、青森県知事が青森県議会を廃止する条例案を出しましたと。これは有り得ないですよ、こんなこと。青森県じゃなく、もちろんP県が、P県議会を廃止する条例を出しました。これに対して、あなたは賛成ですか、反対ですか。それぞれ理由を付して書けと。もちろん、正解は反対と書く。反対と書くけども、これはゼロベースで考えるという趣旨なんです。議会がなく

て、ウツと思うわけです。何が困るんだべと。議会がないと何か困るかなと。そこから考えてみる。大体書くのが、もし議会がなくなれば、知事の暴走が始ると。だから、チェックするために議会は必要だ。それは誰でも書くわね。それだけじゃ満点はあげられないと。もうちょっと突っ込んで、今言ったような話とか。そこから考えていくということでなくちゃいけないんだけど、ふと考えてみてください。皆さんの、県議会は皆そうなんでしょうけども。県議会が無くなって何か困ります？何とか町議会が無くなって、何が困ります？具体的に。何が困りますか。その町長さんが暴走するのを止める。そのためにあんな高い給料を払うの。そのためにあんな政務調査費を払うの、という根本の議論からしていかなくちゃいけないと。

その議論は今しませんけども、一部しましたけども。政務調査費なんかについて怒りました。茨城県鉾田議会では、7人の議員さんが、青森県に視察にきた時に、二泊三日でバスチャーターして、そのバスのガイドさんを夜の席にもってきて、セクハラをしたと。口じゃなくて、手でセクハラをしたということで、これが大問題になっていて、スーパーモーニングで毎週何曜日だかにやっています。それは、鉾田市民だって怒りますよ。ふざけんじゃないと。ワーッと。

今の政務調査費の問題だって何だって怒っていますよ。怒るということはいいいことなんです。これは、実は、怒るためには情報公開、そうやってテレビで報道されたとか。情報公開があつてです。情報が公開されて、そして変なことに気が付いて怒る。怒りは関心の始まりなんです。関心は改革の第一歩なんです。だから、まず怒りから入ってもらおうということ。だから私はいいいと思っているんです。ワーとまず燃え上がる。そこだけで終わらないでしょう。どうなっているんだ、ところで。政務調査費なんぼ貰っているんだ、ということ、これは関心を持つことになります。そして、更に突き進んでいけば、そもそも議会って何のためにあるんだろうかと。今何をしているんだろうか、となっていけば、改革の第一歩。

具体的に、今日もしやるとすれば、議会へ行ってみてください。議会に。入場無料ですから。傍聴席、有料の所はどこもないはず、無料。そうすると、面白いことが分かりますよ。いかに面白くないかということが分かる面白さですよ。何だ、こんなに面白くないのかということ。これ、やっぱり行ってみなきゃ分からない。そこで何か面白そうなことがあると思ったこともあるし、世の中にこんなに面白くないものがあるんだろうかという驚きを、本当に面白い所があるかもしれませぬ。

だけど、それは傍聴席というのは、実はこっち側から議員さん見られるということは、議員さん側からも見られるということなんです。急にドヨドヨって来られると、何かちょっと緊張しますよ。でも、急に態度は変えられないから。やっぱり相変わらず面白くないようなことをせざるを得ない。一般的に言っているんですよ。多分、青森県議会は違うと思いますが。そういうことをちゃんと知るとのこと。それは、プレッシャーかけるということになるんですよ。おかしいんじゃないかというふうになっていって、そこからどうするかということはその次です。

こういうことを実は私は、地方自治は民主主義の学校ということでは言っているんです。地方自治は民主主義の学校。これは、有名なイギリスの学者の言ったことなんです。有名なイギリスの学者と言っても名前を覚えていないんです、恥かしいことに。何とかという人なんだ。いいんだ、名前が大事なじゃなくて、言っていることが大事なんだから。地方自治は民主主義の学校。これは、2つのことを言っています。

1つは、さっきちょっと言ったように、私は政治興味ないことはないんだと。だけど、それは国政だよ。安倍内閣どうなるかとか。小沢一郎さんの何とかとか。イラク問題とか、北朝鮮問題、こういうのは興味ある。だけど、自分の何とか村の田舎館村の状況なんて、全然興味ない。これは有り得ないことなんです。自分の住んでいる半径5km、10km以内で、どんな政治が行われているかということには、全く興味ないけど、国政だけは興味ある。有り得ないんです、これ。ということがまず1つ。だから、地方自治は民主主義の学校というのは、そこから段階を踏んで国までいくということなんです。

しかも、地方自治で行われている生活の方には、そちらの、地方自治のあり様の方が、日々の生活に影響が大きいんですよ、実は。実は大きいんです。ということなんで、そこから入って行って、県政、国政というふうに行くべきものという、そういうものなんです。これが地方自治は民主主義の学校ということが1つ。

それからもう1つは、民主主義の学校なんだから入学しなさいよと。入学金払っているんだから。田舎館村に払っている税金ですよ。田舎館村ってまだあるんですか。合併。村民税として払っているんです。学校の入学金を払っているんですから。そこに入学して行動せよと。どういうふうにはですか、具体的に。そこは分かりません。

今、私は別な活動で地域創造ネットワークジャパンという活動をやっているんですが、これは団塊の世代の地域デビューということの支援をしようと思っているんですが、それと別に団塊ネットというものにも関わっているんですが。今、ちょっと考えているのは、町議会に団塊の世代の卒業生を入れようと思っているんです。これから2007年問題って今年ですよ。ね。定年になっていくと。地元に戻ったりするということもあるでしょう。いろんな社会貢献をやっていいんですよ。ボランティア活動。その中の1つ。全員になられても困るんですが、その中の1つとして、田舎館村に戻ってきて、田舎館村村議会議員になると。報酬なんか要らないんだから。だって、年金も出るというような人達。60ではまだ出ないけど。あまりあてにしていないと。社会貢献の1つなんだから。それを、じゃ、貰うことは貰ってプールして、次の世代を育てるためのお金にするとか。いいんですよ、そういうこと。あまりお金のことは気にしない。しかも、卒業してきたんですから、その入学して学校時代のいろんな仕事上の経験、経歴というのがあるんですよ。議員さんとしてしかあまり知識がないという人に比べれば、実社会での切った張ったも含めた、そういうような実績を持った人がその村議会に入って

きたらかいますよ。

もう1つは女性です。家庭の主婦。もう既に入っています。市民派、無党派、というような、言われるような人達がかもって入ってもいい。ちょっと気の利いたことを言って、気の利いたことをやれば当選しますよ。女性の人達というのは、だって、この頃、みのさんがよく言うんだけど、人口の半分は女性なんだからと言っている。人口の半分は確かに女性なんだと言っている議会を見ると、何だ真っ黒けという所が沢山あるわけです。男性しかいない。これ、代表って言わないんですね。なので、そこに一人でも二人でも入っていくことによって、その議会のあり様を変えるということは、意外と第一段階としてあってもいいんだらうと思います。

そんなことで、実は、私は、今年のテーマは議会なんです。分権というけども、議会が変わらなきゃいけない。その議会を通して、実は住民を見ているからなんです。住民が関心を持たなくちゃいけないということなんです。

ですから、ちょっとここまでの所復習すると、三位一体改革というのは、決して財源を巡って地方、地方自治体という、行政機関としての青森県と国というのが綱引きをしている、こういうイメージじゃないということです。自分が払った税金の使い道ということに対して、直接その住民、納税者たる住民が物を言うような機会が広がるようなシステムと言ったらいいんでしょうかね。さっきの、いろいろペチャクチャ喋ったのは、そういうふうに理解してもらえばいいんですが、そういうようなシステムに1歩でも2歩でも3歩でも近づけようという営みが、三位一体改革なんだということで、地方分権というのはそういう意味です。

その中で、すぐに付け加えるのは、格差のことを余り言うなど。日本人はと言ったらあれだけでも、足らざるを嘆くにあらずして、等しからざるを嘆く。自分の家よりも隣りがうんとあれだとうんと悔しいと。何でうちの町だけこうなんだ、というふうに言うと、皆同じになりたい。というのは、それは地方自治というのは、1つ1つ特色があるということなんだから、違って当たり前なんです。それは、地方自治って、分権というのは、1つは自由を得るといえることが言えますよね。財政的な自立、財政的な自由を得る。間違えちゃいけない。自由の中には、失敗する自由というの含まれているんですよ。いやいや失敗したら大変だからなど。こういうふうに言うと、これが霞ヶ関の思うツボなんです。霞ヶ関というのは、言ってみれば怖い顔をしたお父ちゃんじゃなくて、優しい顔をした過保護ママなんです。田舎館村が失敗したらいけないから、いろんな指導をしたり支援をしたり、補助金まで出してあげると。変な村長さん、町長さん、これ具体的に なっちゃうんですが、知らないですよ、田舎館の村長さん。どこでもいいんです。いても、ちゃんと補助金でやれるように、何故か。そこに住民がいるでしょう。その人達が格差で泣かないようにするために、という優しい顔をして登場してくるんですから、霞ヶ関の補助金、負担金を配っている人は、おっかない顔をしたおじちゃんじゃないんですよ。そこに我々は実は自由をと言っている中には、自由でボンとほったらかされている子どもをイメージすればいいんですよ。それは、あっちこっち行って不良になったりするのもあるということ、そうさせないために実は住民がいるということですよ。だから、住民

の今度は出番が大きくなるということでイメージしてもらえば、自ずから格差格差って言うなって言うか。格差があっていいって言うんじゃないですよ。格差がないようにするのは、自分達でやれよということなんです、それは。格差がないように霞ヶ関お願いしますというのは、地方分権を語る資格がない、という話を今ちょっとしてきました。

最後に、市町村合併と道州制、時間がないんだけど、道州制の方からいくと、この北東北、青森、岩手、秋田というのは、そういう意味で実践という意味では、道州制でも何でもありませんよ、まだ。共同事業ということで、1県でやるよりも、3県でやったらこんなにいいことがある。だったら合併しようかという、今、瀬踏みをしているような状況なんで、道州制という所まで、こんなに距離があるんですが。しかし、先行しているということがあるんですね。

私は、この前、エコノミストの特集で書いたんですが、良い道州制、悪い道州制。当然ながら道州制にも良い道州制と悪い道州制がある。どうも道州制って良いことのようにだけでも、慎重にというのが私の結論なんです。目つぶって、道州制っていいんだというふうにはいかないでしょうと、いろんなものがあるんだから。というのと、そこまでいくの大変だっていうの。市町村合併も大変だったんだけど、あれは、このままでいったら自分達のあれが財政的にもいろんな意味で壁にぶつかるといって、切羽詰った気持ちがあったから、あのエネルギーが出てきて、反対があったりあれしても、何割かは成功で合併に行ったんでしょう。道州制で今、青森県がこのまま青森県というだけでやっていったらどうしようもないというほどになっているかどうか、全国的に。まだまだそこまでは距離があるんで、政治的なエネルギーが出てくるかどうかということです。

僕が今、一番心配しているのは、政府から出てきている道州制案というのは気をつけなくちゃいけない。これは、毒まんじゅう論と言っています。毒まんじゅうかもしれないよと。だって、国と地方との関係を整理する時に、国から出てきた案が、国に不利な案というのを持ってくることはないでしょうと。三位一体改革の流れを見てもそうでしょうと。毒まんじゅう。だから、案の中身に気を付けましょうと。一応、落ちもついているんですが。よく見ていって、道州制というのは言葉はいいから、これになれば皆ばら色に、いろんな今持っている問題が解決する、そんなだったら三位一体なんかもう出来ているはずでしょう。そういうような心根があるんだったら。それがこういう状態だからというので、道州制は駄目だと言っているんじゃないですよ。これはやっぱり眉に唾をすとか。アンをちょっと舐めてみるとか。舐めたら死んじゃったりするんですけど。

というようなことでいきましょうと。時間がなくて、ここまでいきませんでした。本当は、ここからが私の面白いところなんです、今は本当に前座の前座みたいなものですが、予定通りですね、2時ぴったりに終わろうということで、あと15秒でございます。この後が、トークセッションですね。「なぜ？地方分権」ということで、さらにお学びになればと思います。

ご静聴ありがとうございました。